アルバと暮した日々

―ある犬の運命―

谷本光典

ある日、

「キューン、キューン」

犬が鼻を鳴らす音がする。二メートルほど向うで、やや毛の長い白い犬が、白いといってもそうとう汚れていて、洗ってやったらおそらく真っ白の犬、耳のたれた洋種の血の濃い雑種と思われるが、しきりに私に呼びかけていた。

昭和十五年の、秋の午後のことである。木造の教室と教室、病棟と病棟の間、いたるところに、柘榴の大木が植っていた。秋が深まると、赤・黄・緑とぼかしのかかった赤ん坊の頭ほどの果実が、パッと先を割って、そこから、すき透った真紅の実がのぞいている。

午後の講義は出席しないことを原則としていた私は、好物の柘榴の一個をもぎ採って医学部の敷地の西北隅の草地へ、腰を据えることにしていた。

酸っぱさの中に、痕跡のようなほのかな甘みが、歯先でつぶれた内果皮から浸み出して口の中に拡がる。秋を食べる、といったら大げさであろうか。私はゆっくり固い種子を、ペッ、ペッと、草地へ吐き棄てる。

そして、格好づけだけに持っている医書とノートを、バンドで十文字にしばった固まりを膝から草地へ抛り出し、そこへ着ていた白衣を丸めて枕として、長々と寝そべる。

ズボンのポケットから、まだ発禁にはなっていないが、もうとっくに印刷出版されなくなった岩波の白帯本や、改造文庫本を引っぱりだして読みふけるのが、昭和十五年、M大医学部学生時代の私の日課であった。眠くなると、白衣の塊りから袖か裾か、手当り次第に引っぱり出して顔にかける。うるさく寄ってくる蠅を避けるためである。

「キューン、キューン」と鼻を鳴らして、犬が私に呼びかけている。

「こい、こい、おいで」

手を出すと犬の表情がゆるんで、寝そべった私に近づいてきた。手の先にちょっと鼻を近づけてから腹、腰のあたり、そしてぐるっと足もとを廻って背中まで嗅ぎまわった。それから、私の吐き出した種子をたしかめ、表面が赤、黄まだら、内面の白い外果皮をちょっと噛んでみて、

「キューン、キュ、キューン」と私に話しかけるように鼻声を出した。

「なんてまずいものを食ってるの?」と言わんばかりに心もち首をかしげて、私の目をのぞきこんでいる。目には、ちょうどその日の秋の空のように透明な感情と、育ちのよさが漂っている。

「おい、名前はなんと言うんだい?」

「キュ、キューン」

「白か?チロか?ハクか?」

「キュ、キューン」

これではいっこう会話ははかどらない。

「ブラン? ブランク? ブランカ?」識っている限りの外国語の「白」に当る言葉をならべてみた。

「ワイス?レベディーン?ペェーチェ?」うろおぼえのロシア語も、朝鮮語も通用しない。

「白楽天?白髪三千丈?」

自分で口にして、自分で声に出して笑いだすしまつ。

犬は、それでも真面目な顔で、

「キュ、キュ、キューン」と私の話しかけに答えている。あっ、もう一つラテン語が残っている。

「アルバ?」

「ワン」

「アルバか?」

「ワン」

力いっぱい尻っぽをふって犬は嬉しそうに寄ってきて、私の手首に鼻を押しつけた。鼻先は、意外に冷たかった。そして、ぬくい舌の先をちょろっと出して、手首の肌をなめた。「やっと、名前が判ってくれた」というお礼の挨拶のように受けとれた。そ

れにしても、この洋種雑犬は、優雅にもラテン語で「白」と呼ばれていたらしい。

戦争がきびしい情勢になってきて、人間にとっても乏しい食糧でペットを飼うことがむつかしくなり、犬や猫が実験動物として、あちこちの教室へ引きとられるという時代であった。あるいは日本を引揚げることになったラテン系外人の飼い犬だったかも知れない、と思った。

九月には日本軍が仏印北部を侵略した。十月早々には総力戦研究所が法定化され、あっという間に大政翼賛会が発足した。もうとっくに政党は、自主的をよそおわされて解党していた。「ゼイタクは敵だ！」というビラが街頭で白いタスキの婆さんたちの手で配られ、バットが「金鵄」、チェリーが「桜」と名を変えられた時代である。

どんな人が、この躾のいい犬を飼っていたのだろうか？いろいろ問いかけると、犬は「キューン、キューン」と犬語で答えるのだけれど、残念ながら私に「ソロモンの指輪」があるはずはなかった。

その当時の医学部では、各教室ごと、大きな教室では研究室ごとに動物舎があり、動物係りの小父さんがいた。おそらくこの「アルバ」も、そのどこかで養われているのであろうが、人なつこくて聞き分けのいいところから飼育係りの小父さんに可愛がられ、窮屈な犬小舎に入れられることもなく、放し飼いにされていたのであろう。

晴天が数日続いて、私は毎日午後をアルバと暮した。朝、下宿の味噌汁に入っているダシニボシを、紙にくるんでポケットへ入れておく。手にとって差し出してやると、口にくわえ、ヒョイと横にして奥歯で噛んで食べてくれた。ポイと投げてやると、走っていってくわえ、私の足もとにおき、黙って顔を眺める。「よし」と言ってやるとはじめて口にした。

日を重ねるにつれて、私は躾のいい犬というよりも「教養のある犬」という形で、アルバとつき合っていることに気がついた。

毎日四時になると、いつも近づく時、「入っていいか？」と訊ねるような鼻声を出す。私を中心とする半径二メートルの線をちょっと越してふり向き「ク、ク、キューン」と別れの挨拶をしてから、一直線に教室の角を曲って消えた。

ある日、

結局それは、私がアルバと暮した最後の日になってしまったが、アルバは何か小動物の大腿骨をくわえて、最初から私のテリトリーと決めてかかっていた半径二メートルの線で、鼻声で呼びかけた。

「おいで」と言ってやると、骨を私の前の柘榴の種子を吐き出した上に置いた。

「おゝ、アルバの大好物らしいな。よし！」と言っても、さかんに鼻を鳴らしている。

「どうするんだい」

手に取って、ちょっと遠くへ投げてやると、飛んでいってくわえてくる。またもとの所へ置いて顔を見上げる。

「あゝそうか。これを齧れということか」私はそう気がついて、自分の大きく開けた口に近づけ、噛む真似をしてからアルバの口へ差しだしてやった。

アルバはそれをガッと噛んで、ぐっと腰を上げ、首を下げた姿勢から、パッと逆の体勢になり、上空に向って骨をかなり高く抛りあげた。落ちてくるのを飛び上って空中で口にくわえ、「どうだ」と言わんばかりに私の前に置いた。

「それはダメだ。参ったよ。ボクにはできん、アルバ」

そう言いながら、頭と耳をなでてやると、アルバは満足そうに大きく口をあけて、私の左手首を軽く噛んだ。

奇妙な友情が、それはもう犬と人間という種の違いを超越して、心が流れ合うような、かなり長い時間――それにしても四、五十秒であったろうが――アルバはじっと私の手首をくわえていた。

秋の雨が続いた三日目の午後、まだ糸のように降る雨をついて、私はいつもの場所へ行った。寝ころぶどころではない。腰も降せない。しゃがんだままアルバの現れるのを待った。「アルバ」「アルバ」一時間待つあいだに何度も呼んでみたけれど、アルバはこなかった。

その次の日か、あるいはもう一日あとだったか、私はアルバに逢うためだけにまた半日を空しく過した。どこかにつながれているかも知れない。教室と教室、病棟間の空地を、私は、「アルバ」「アルバ」と、最初の小声が段々大声になるのに気がつきながら呼んで廻った。

どこかに居れば、「ワン」とか「キューン、キューン」とか、耳に馴れた返事があるはずだ。金網の向うの鉄棒につかまりながら精神病棟では、

「おーい気違い！どこから出た。俺にも出口教えろよ！」という声に、思わずこみ上げる苦笑いも、そのまま苦く心に反射した。

空しかった。いつの間に、誰が採ってしまったのか空地の柘榴はみんななくなっていて、高い梢に一つ二つだけ残っていた。きっとあれは、冬の野鳥の餌として残したものだろう。それにしてもアルバの暗い運命は不吉な予感となって、私の心を灰色の

霖雨の空のように重くおしつぶした。

それっきり、私の身辺は急にあわただしくなった。その当時としては危険な運動に足をつっこんでいた私には、もうアルバをさがす時間はなかった。しかし、あぶなっかしい綱渡りのような昼と夜の連続の中で、ふと私は、アルバが手首におしつけた冷たい鼻、つつましやかにチョロッとなめた温い舌、最後の日、心と心のつながった握手のような、左手首に柔く当った長い時間のアルバの歯の感触を、何度も憶い出した。

ある日、

それはもう、敗戦から十年とちょっと経っていたろうか。ある小さなバーで、動物好きのホステスを相手に飲んでいて、ふと、アルバのことを憶い出し口にした。すると、カウンターの留り木で一人で飲んでいた私より一廻りほど年上の紳士が、

「失礼ですが、戦争中M大の医学部においでになった方ですね。私の飼っていた犬です。間違いありません」と、私の席へグラスを持って移動して来た。

この人は二匹の犬を飼っていた。一匹を「シンドバッド」一匹を「アリババ」と名をつけたが、呼ぶ時は「シン」「アリバ」と呼んでいた。「シン」が死んでじき、この人に赤紙が来た。奥さんと二人の子供さんだけで、一匹の犬が飼っていける時代ではなかった。近所に医学部の動物飼育係をやっていた老人がいたし、アリバもこの人になついていたので、大学へ引きとってもらったというわけである。

「「アルバ」と呼ばれて、アリバは嬉しかったでしょうね。あの犬は、あやしい人物に向った時は「ワン、ワン、ワン」。名を呼ばれた時は「ワン」と一声。それ以外はめったに「ワン」とは鳴きませんでした。あとは、「キュー、キュー、キュー、キュー」鼻で喋っていました。嬉しい時は左手首に鼻を押しつけて、ちょっと舌で触りました。一番嬉しい時は、左手首をじっとくわえて、なまめかしい目付きで私の顔を見上げましたよ。家内は「いやらしい。これが犬かしら」と冗談半分、やきもち半分でしたよ。

――しかし、よく名前まで当てて、可愛がってやって下さいました――」

泣き上戸でもなさそうなのに、最後の方は涙声であった。

「いや、あなたの躾けもよかったと思いますが、ボクは、あの犬は教養のある犬だと評価していました」というと、

「教養のある犬とは恐れ入ります。初耳です。――しかし、餌を貰う手は右手、自分が愛情を示す手は左手、これは私が教えたわけでなく、いつの間にか自分でそう区別していました――」

柘榴の実を食べている飢えた学生を憐んで、骨を運んでくれたことや、その意味がやっと判って、好意を受け入れるふりをしたら喜んで珍芸を見せてくれたことや、もう一度話がはずんでから、

「で、最後はどうなりました」

半ば恐れを抱いていた質問で、私もきっとこれがくると予想していたので、

「いやあ、実は、学校の方が忙がしくなって尻り切れトンボですわ」と、私自身の暗い想像については触れなかったけれど、心は読み取られたらしい。

紳士は、立っていって、その当時としては高級ウイスキー、ジョニーの赤を一本、栓をあけ、

「教養のあるアルバ、私のなつかしいアリバのために乾杯してやって下さい」

ぐいと飲みほすと、すぐ席を立って、オーバーかけにひっかけてあったソフトを、顔にそってかくすようにかむりながら。

「どうぞそのボトル、アルバ記念にお飲み下さい――」

そそくさとドアを開けて出ていった。

「あの人、泣いてるよ――戦争から帰ってみえたら、奥さんも子供さんも、三月中頃の空襲で、どんなふうに、どこで死んなさったも、判らないんだそうよ――」

ポツンとホステスが言った。

私は、あの透明な柘榴と秋空のように澄んだアルバの瞳を憶い出すと同時に、戦争に対する憎しみが、さっきあおったオールドファッション八分入りのストレートとともに、腹の中でメラメラと燃え上るのを感じていた。

（愛知県医師会副会長）